

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 3 部門第 2 区分

【発行日】平成 26 年 1 月 23 日 (2014.1.23)

【公表番号】特表 2013-505206 (P2013-505206A)

【公表日】平成 25 年 2 月 14 日 (2013.2.14)

【年通号数】公開・登録公報 2013-008

【出願番号】特願 2012-529144 (P2012-529144)

【国際特許分類】

C 0 7 D 255/02 (2006.01)

B 0 1 J 31/22 (2006.01)

B 0 1 J 37/12 (2006.01)

B 0 1 J 37/04 (2006.01)

C 0 7 F 13/00 (2006.01)

C 0 7 F 15/02 (2006.01)

C 0 7 F 19/00 (2006.01)

【 F I 】

C 0 7 D 255/02

B 0 1 J 31/22 Z A B M

B 0 1 J 37/12

B 0 1 J 37/04 1 0 2

C 0 7 F 13/00 A

C 0 7 F 15/02

C 0 7 F 19/00

【誤訳訂正書】

【提出日】平成 25 年 11 月 28 日 (2013.11.28)

【誤訳訂正 1】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 1 7

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【 0 0 1 7 】

ラジカル R として記載したアルキル基は、好ましくは C₁ ~ C₄ - アルキルであり、そしてラジカル R として記載した アリール 基は、好ましくは C₆ H₅ (フェニル) である。

【誤訳訂正 2】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 2 3

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【 0 0 2 3 】

段階 a) におけるマンガン (I I) 塩および場合により追加的に鉄 (I I) 塩の配位子 L との反応は、本発明により、唯一の溶剤としての水において実施される。好ましくは、二価金属塩または金属 (I I) 塩 (すなわち、マンガン (I I) 塩および場合により追加的に鉄 (I I) 塩の合計) および錯化合物が合わせて 1 0 0 重量部の水あたり少なくとも 1 5 重量部の量で存在するのに十分な水のみが使用される。金属 (I I) 塩および錯化合物の濃度の上限は非常に高くてもよく、なぜならば、このおよびさらなる反応は、溶液中でも懸濁液 (分散液) 中でも実施することができるからである。従って、濃度上限は本質的に、反応混合物の攪拌能力 (R u e h r b a r k e i t) に依存し、攪拌能力はまた空時収量に対する限定因子でもある。従って、金属 (I I) 塩および配位子は合わせて、1 0

0重量部の水あたり、好ましくは15～55重量部、特に好ましくは20～50重量部の量で使用される。水中における金属(II)塩の配位子Lとの反応は、10～30、好ましくは15～25(室温)の温度で、および大気圧で実施される。本発明の方法の段階a)は、溶剤混合物に溶解した、金属(II)塩および配位子化合物からの配位化合物を形成させる。水中における金属(II)塩および配位子の量の計算では、場合により金属(II)塩に含有される結晶水を溶剤である水に含める。